

## 私と「和」との出会い

星野さんの体験から

戦前の日本について考えたこと

寺内 徹乗

### (1) 星野さんとの出会い

私が「和」の川柳と出会ったのは、平成26年5月、故・星野啓二郎さん(柳号・星啓さん)との出会いであった。それは、鶴彬を顕彰する会の役員でもあり和川柳社同人の岩原茂明さんが「私の知り合いに特攻隊

にいた方がい

るので、一緒

に話を聞きま

せんか」とい

うお誘いから

始まった。

私たちは

メロメロボツ

チという金沢

故・星野啓次郎さん

武蔵ヶ辻の地下の喫茶店でお話を聞かせて頂いた。その後、高松の浄専寺でも講演して頂いた。その後私は、金沢市の長町公民館での和の句会にも顔を出すようになった。星野さんの話をもっと聞きたいと思ったからだ。その当時、和の定例会に来られていた人たちは、星野さんの他、前田大峰さん、岩原さん夫婦と私の5人ほどの小所帯であった。和の主宰だった岡田一杜さんは入院中であり、回復されたら一杜さんにも戦争中の話を聞きたいと思っていた矢先、平成27年3月、亡くなられた。そして、星野さんも平成29年5月、亡くなられた。

星野さんと出会った当時、百田尚樹原作・山崎貴監督の「永遠の0」という映画が大ヒット中であった。私も見に行ったが、疑問が湧いてきた。映画に登場する主人公の宮部久蔵という架空の航空兵が、どういう経緯で特攻兵になったかという肝心な場面が全く描かれていない。上官に命令され渋々特攻兵になったのか。あるいは上官に特攻として死なせてほしいと直訴した



のか。前者なら残酷な物語であり、後者だとしても、自分の死後に愛する妻子を後輩に面倒を見させることにし自己完結するという身勝手な物語となる。結局は、後輩と妻が恋愛し、夫婦になるのだが、その歪んだ友愛や夫婦愛を見せつけられた私は、気持ちが悪いとは思わなかった。しかし「永遠の0」は、多くの鑑賞者が涙を流し、日本アカデミー賞最優秀作品賞を受賞した作品となった。ちょうどそうしたタイミンで、岩原さんが誘ってくれたのである。

星野さんは地下の喫茶店で5時間ほど語って下さった。星野さんのお話には私の知らない世界が広がっていた。私が、一番聞きたかった質問は、「なぜ特攻兵になったのですか？」ということである。その問いに対し、星野さんは自分がなぜ14歳で少年兵になったのかということから丁寧に説明をはじめた。つまり、戦前どのような学校教育が行われ、国民の雰囲気はどのようなものであったかということを知らなければ、最初の問いの答えは見つからなかった。

## (2) 祖母から聞いた戦争

私は今まで深く戦争の歴史の勉強をしたことはな

かった。戦前の話と言えば、乳母のように幼い私の面倒をみてくれた大正生まれの祖母から聞いた話である。祖母は昭和50年代になっても日本が戦争に敗けたことを悔しがっていた。そして夫(私の祖父)の体格が小さかったために兵隊免除になったことを生涯コンプレックスに思っていた。祖母は日に日に成長する私を目を細めて眺めながら、「立派な兵隊になれる」と喜んでいた。幼い私に世界地図を見せながら、当時は「大日本帝国」という立派な名前であり、朝鮮も台湾も昔は日本で、満州国という国があったと語っていた。そんなすごい日本が戦争に敗けた理由は、湯川博士の開発した原爆を使うという卑怯なことをしたからだというデマまで語っていた。祖母は初代・神武天皇から第二百二十四代・昭和天皇に至る歴代天皇を幼い私の前ですらすらと暗唱して見せ、「私が教室で一番先に覚え、先生に褒められた」という自慢話もしてくれた。そう語る祖母の部屋には昭和天皇と皇后の写真が飾られていた。

祖母は富山県福光町(現在南砺市)の貧しい小作農家に生まれた。小学校を出てから女工として働き、結婚後は大阪で暮らしていたが、戦争が激しくなると、娘

(私の伯母)を連れ、実家に疎開した。祖父は大阪の軍需工場に残ったが、運よく家族全員生き残り、祖母の家族にも戦争の犠牲者はいなかった。戦後、GHQのおかげで、祖母の実家は土地持ちの農家になれ、祖父と祖母はかほく市高松で洋服の仕立て屋として成功し、息子二人(長男が私の父)にも恵まれた。祖母は私にとってはやさしいおばあちゃんであったが、戦争の反省をすることなく、今ある平和についても考えることもなく、平成に入り生涯を終えた。日本が戦争に敗けたおかげで、豊かな生活をおくれたわけだし、自分の子どもたちも戦争に行かずに済んだのであるが、そのところをどう思うのか聞いておけばよかったが、私自身も戦争の歴史について深く考えたことはなかった。祖母と同類であった。

### (3) 鶴彬との出会い

戦争について学ぶきっかけは、鶴彬との出会いである。平成25年に鶴彬を顕彰する会の小山広助さんからお誘いがあり、入会した。そのときに鶴彬通信「はばたき」を編集していた角島広治さんに、鶴彬に関する原稿を何でもいいから書いてほしいと頼まれた。私は川柳のことも戦争の歴史のことも何も知らない。

それで基本的なところから勉強をしようと思いい図書館に行った。たまたま本棚にあった半藤一利著の『昭和史』が目にとまった。今年の一月、半藤さんが亡くなったというニュースには驚いたが、当時の私は半藤一利という名前さえ知らなかった。この本を選んだのは、背表紙がインパクトがあつたということ、分厚い本だったが平易な文章で書かれており、これなら私でも読めそうだと感じたからである。実際「へえー」と思うことばかりで夢中になって読んだ。ただこの本は、当時の日本のリーダーたちがどう考え、どう判断し、どういう結果になったかという俯瞰的な立場で解説していたものであった。半藤さんの本に限らず、日本学術会議で除名されたことでも有名になった加藤陽子さんの『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』も俯瞰的な立場で歴史を解説してある。それはそれとして歴史を学ぶ上では避けて通れない道なのだが、末端の国民が何を経験し、何を考え、どう行動したかという目線ではなかった。だから、星野さんのお話は私にとって衝撃的なものだった。星野さんの話を聞いた後で、仏教史や西田哲学などを学びなおすと、また新たな発見もあった。

星野さんは、幼少期に受けた教育、すなわち教育勅語

修身教育、奉安殿、宮城遙拝について話をされた。私は、教育勅語や修身という言葉は聞いたことがあったが詳しいことは知らず、奉安殿、宮城遙拝は初めて聞く言葉であった。しかし、「ああ、そういうことだったのか」と合点したこともある。

近代仏教史や日本思想史の本を読んで知ったことであるが、明治政府を作った政治家たちは、欧米列強がキリスト教によって国民がまとまっていることを学んだ。だから日本も富国強兵の国家を実現させるためには、国民をまとめる宗教が必要だと考えた。明治政府を作った政治家は、仏教が伝来する以前の神道―江戸時代に本居宣長・賀茂真淵・平田篤胤ら国学者が復古神道として研究していた神道こそがそれにふさわしいと考えた。そこで、明治元年、神仏分離令を出し、神仏習合していた伝統的な宗教から仏教的だと考えられたものを排除し、神話を復活させ、天皇を神とする、新宗教を作った。

#### (4) 古代宗教と天皇制のこと

仏教が伝わる以前の神道は、実際は、山岳信仰など自然の畏怖に対する素朴な信仰であったと思われる。

この古代神道は地域的であり、民衆的であり、決して中央集権的な天皇崇拜ではなかった。古くは6世紀、聖徳太子は十七条の憲法の中に「篤く(仏法僧の)三宝を敬へ」とあるように、日本史は仏教とともに進展していった。大和王朝は豪族の蘇我氏を排し、天皇を中心とする律令国家を整えていった。その天皇の政治的権力が強かった奈良時代でさえも、仏教の前では謙虚であった。聖武天皇は奈良の大仏を建立し、仏教の力で国を治めようとし(鎮護国家)、平安時代以降も天皇は仏教を庇護し、出家し法皇となる者もいた。明治になり、天皇が仏教より優位に立ち、神となった。これは日本史上初めてではないか。だから私はあえて「新宗教」と言葉を使っているが、当時の国民はこれが宗教だという自覚はほとんどなかった。実際、政治イデオロギーとして「皇道」と当時は呼んでいた。現在は明治以降の神道を古代の神道と区別するため「国家神道」と呼んだりするが、この二つの神道は似て非なるものである。しかし現在の神道が日本古来の神道だと多くの国民が勘違いしているし、その中でも日本会議に属する安倍晋三元首相をはじめとする政治家や評論家たちは、戦後平和主義の理念を覆そうとする勢力となっている。

ところで神話の「古事記」では、女神である天照大神（アマテラスオオミカミ）の孫であるニニミノミコトが天から地上（九州の高天原）に降り立った（天孫降臨）。「古事記」がなぜ作られたかという点、権力基盤の弱かった第41代の持統天皇（女性天皇）が、その孫の第24代文武天皇へ権力を移行される段階で、その正当性を国内に示すためだったという説もある。天照大神の両親はイザナギノミコトとイザナミノミコトという男女の神様であるが、イザナギとイザナミは天照大神を生む前に日本の島々も作っている。

不思議なことに「古事記」が創作された7〜8世紀にはすでに大陸との交流があり、渡来人から漢字を学び、中国式の仏教寺院も作られ、中国式の律令政治が整えられていった。従って古事記の作者が大陸の存在を知らないはずはないのだが、神話では大陸の存在は完全に無視され、神々の力の及ぶ範囲も日本に限られていた。これに従い、明治政府による国づくりも古事記にある範囲であったならば外国の人々を苦しめずに済み、世界大戦に発展することもなかったであろうが、明治にできた新宗教は神話の範囲から逸脱し、神の威

光を世界へ広げようとし、日本が支配したアジアの人々にも皇民化教育を行い、天皇崇拜を強要した。皇道が世界に広がり、アジアだけでなく欧米列強もこれに従うという的外れた大言は、昭和18年、西田幾多郎が陸軍に講義したものをまとめた「世界新秩序の原理」にも書かれてあるが、この神がかった西田哲学は侵略戦争を推し進める軍人たちの自信を深めていった。

明治22年に公布された大日本帝国憲法にも天皇については、「天照大神とその子孫である神武天皇からの（万世一系）であり、「神聖にして犯すべからず」と説かれ、憲法上の国家元首でありながら神となった。政治的権力と宗教的権力が対抗しながら形成された欧米の近代国家とは異なり、日本は政教一致の国家であった。しかも、国家元首が神という点でも、歴史的にみて極めて特殊な国家であった。このことがいざれ特攻や玉砕といった世界史的にみても前代未聞な悲劇を生み出した。

### （5） 教育勅語と軍人勅諭

明治政府は初代天皇とされる神話上の神武天皇を祭った橿原神宮、桓武天皇を祭った平安神宮、明治天皇を祭った明治神宮、天皇のために戦死した者を祭つ

た靖国神社（招魂社）などの建設を国家事業として進め、学校教育の中でも教育勅語を中心に新宗教を浸透させていった。この国家による洗脳―星野さんも「洗脳」という言葉を使っていた―は、国家から国民へ、国民から国民へと世代を超えて深まっていった。

この国家による洗脳は、明治元年の神仏分離令に始まったが、明治15年、天皇の神聖なるお言葉である「軍人勅諭」が発布され、一段と深まった。「軍人勅諭」は徴兵された男子が暗唱することは必須であったし、星野さんも軍隊でまず最初に覚えさせられ、一語でも間違えたら連帯責任として「軍人精神注入棒」と書かれた木製のバッドで尻を殴られるという体罰を受けたと話された。

明治23年、政府は「教育勅語」を発布し、幼少期に子どもは男女を問わず国民は全員暗記させた。昭和10年頃、校内に奉安殿というものが盛んに作られるようになり、登下校時は、天皇の御真影（写真）と教育勅語が納められている奉安殿に最敬礼した。集会では校長が恭しく教育勅語を読み上げる儀式や、宮城遙拝という皆で皇居の方角へ最敬礼する儀式があった。宮城遙拝は、第二次世界大戦中に国内外で盛んにされたらしいが、私が星野さんからこの話を聞いた時、まるでイ

スラム教のメッカへの礼拝のようだと思った。

そのような国家による洗脳が、宗教という自覚のないまま国民の中で深まっていった。そしていつしか日本は大東亜の盟主であるという驕りも生まれ、戦況が不利になっても、「日本は神の国だから絶対に負けぬ」「いずれ神風が吹く」という根拠のない自信になっていった。この新宗教は、昭和5年、近衛文麿政権下の皇紀二千六百年式典というバカ騒ぎで臨界点に達し、昭和20年の敗戦による天皇の人間宣言まで続くことになる。ただ、令和改元の一連のお祭り騒ぎを見ていると、この洗脳が国民の中では戦後70年たっても完全にはぬぐい切れていないように私には見えた。当時の安倍政権の支持率が上がるという怪奇現象まで起こった。平成から令和になったところで、一体何が変わるといえるのか。年号が変わって喜んでる人たちに聞いてみたいものだ。

## (6) そして治安維持法

脱線したが、星野さんは重要な指摘をされていた。教育勅語の延長線上に軍人勅諭があったということだ。公布された時代は軍人勅諭の方が古いが、国民（男子）は、教育勅語によってまず洗脳され、軍人勅語によつ

てさらにその洗脳を深めていった。どちらも明治天皇のお言葉であり、国民にとつて神聖なものである。だから、私の問いである「なぜ特攻になったのですか」という答えは、教育勅語と軍人勅諭を理解しなければ分からない。その核心部分は次のものだ。

教育勅語の一節「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ（現代語訳）万一危急の大事が起つたならば、大義に基づいて勇気をふるひ一身を捧げて皇室国家の為につくせ」

軍人勅諭の一節「世論に惑はず政治に拘らず只々一途に己か本分の忠節を守り義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも軽しと覺悟せよ（現代語訳）世論に惑わず、政治に関わることなく、ただ一途におのれの本分たる忠節を守り、義務は山より重く、死は羽毛より軽いと覺悟せよ」

この二つを意識すれば、「わらわは神であるぞ。民の命など鳥の羽のように軽いのじゃ。わらわが困ったときは、つべこべ言わず、わらわを守るために死に給うのじゃ」と言っている。教育とは恐ろしい。当時の国民（信者）は、そのお言葉を有難がっているのだ。

もちろん、教育勅語も軍人勅諭も、明治天皇が考えたものではなく、明治政府が国民をコントロールするために天皇に語らせたものである。もちろん国民みんなが洗脳されたわけではない。しかし、これに異を唱える者（幸徳秋水・内山愚童・金子文子など）は大逆事件を企てたとして因縁をつけられ処刑または獄死し、大正年、治安維持法ができてからは怪しい者はことごとく逮捕され、もの言えぬ時代になった。

### (7) “予科練へのあこがれ”

星野少年も、子どもだから仕方あるまいが、洗脳された一人だった。学校に海軍飛行予科練習生（予科練）兵募集のポスターがあり、「かっこいいな」と思って憧れたそうだ。その時代の少年たちは、兵隊になつてお国のために役立つことが誉れであり親孝行でもあった。そして徴兵検査で不合格となったものは、一門の恥さらしとなった。私の祖父は私が生まれる前に病死したので、どう思っていたのか分からないが、私の祖母は夫が兵隊になれなかったことを戦後もコンプレックスとして引きずったことは先に述べた。三島由紀夫も体が貧弱であったため兵隊になれなかった。これをコンプレックスとして感じ、生涯それを引きずり、ボディ

ビルを始め、作品としても昇華し、最後は壮絶な死を遂げた。

星野さんの担任の教師は、星野さんを予科練に推薦した。予科練に入隊できるものは、成績もトップで運動能力も優れた者である。予科練にはなりたくても誰でもなれるものではなかった。また当時、星野さんにとって人生の選択肢がなく、国民学校を卒業したら軍需工場で勤勞奉仕するか、満蒙開拓青少年義勇軍に入るかしかなかったので、予科練に入ったと語られた。

### (8) マズローの心理学

これを科学的に解説したい。私は大学で看護学を学んだとき、マズローという心理学者の説で人間を考えることが重要だと教えられた。実際にこの知識は臨床で役に立っている。

マズローは人間の欲求を①生理的欲求 ②安全欲求 ③社会的欲求 ④承認欲求 ⑤自己実現欲求の5つに分けた。マズローによれば、平時では子どもたちが勉強やスポーツに励むのは自分の夢を実現したいという「自己実現欲求」や家族や学友あるいは異性から認め

られたいという「承認欲求」を満たすために行動している。

しかし、戦時の少年たちは立派な兵になってお国のために死ぬことが、最高の④承認欲求を満たす行爲だった。また当時は、戦争に勝てば豊かになれる、つまり①生理的欲求も②安全欲求も満たされると信じられていた。戦争に同調することで③社会的欲求は満たされた。逆に、隣組ができたことにより互いが監視し合う時代となり、戦争に反対することは非国民となり社会から排除され、③社会的欲求が満たされない結果になる。この時代、⑤自己実現という欲求は我慢せねばならなかった。すなわちこの時代に生まれてしまった者は、①②③④の欲求を満たすために生き、結果として死を覚悟して戦争に行くしかなかった。

特攻を特集した或る番組を見た。戦時中、新聞やラジオ、ニュース映画などの報道は特攻隊を神の如きだとして称え、国民もそれに熱狂した。或る特攻兵の実家の前には、軍神となった息子の顕彰碑が高らかに立てられた。しかし、敗戦後のある日、近所の人たちがその実家に押しかけ、「戦争が終わったのに、いつまでそんなものを立てているんだ」と言って顕彰碑を壊

していった。父親は自分の息子の死は一体なんだったのかと泣き崩れた。戦後①生理的欲求と②安全欲求が保証され、④承認欲求を満たすための価値基準が、百八十度変わった。だから、このような悲劇が生まれたのである。

### (9) 「元少年航空兵」

戦前の話に戻ろう。軍隊に入ってしまったら、あとは死へのレールが敷かれている。逃げられないのだ。星野さんは、講演などでは「元特攻兵」と呼ばれることを非常に嫌がり、「元少年航空兵」と紹介をしてほしいと言われた。私たち戦後生まれの者は、特攻隊は特別な任務を与えられた兵隊だと考えてしまう。しかし、元特攻隊の星野さんからすれば、兵隊は家を出たときから死を覚悟しており、自分たちは特別ではないという。

星野さんたち少年兵らは班長による激しい暴力を伴う猛特訓の中で、軍人勅諭や先陣訓を叩き込まれた。そして一堂に整列させられた。上官は神風特攻隊の第一号となった関行男大尉の武勇を雄弁に語り、「特攻に志願する者は前に出よ」と号令した。星野さんたち少年兵らは条件反射的に前に出たという。一人だけ出

なかつた者がいたが、「貴様は命が惜しいか」と暴行を受け、結局は前に出たという。特攻は志願という名の強制であった。私は、別の元特攻兵（「震洋」というボートによる特攻）から話を聞く機会もあった。その人の話では、一堂に兵隊が並ばされ、「目をつぶれ。特攻に志願する者は前に出よ」と号令された。その人も含め全員前に出た。これが「なぜ特攻兵になつたのですか？」という問いの答えである。

特攻に志願してしまった以上、あとは死の順番を待つだけである。星野さんが言うには、少年兵は、時間も燃料もない中で飛行戦ができるほどの訓練は受けておらず、飛んで着地するのがやっとであった。また、有名なゼロ戦でも、250キロ爆弾を積んで飛ぶのがやっとである。250キロ程度の爆弾では艦船は沈まない。敵の艦船に近づく前に、敵の戦闘機（グラマン）によって蜂の巣にされる。星野さんは沖縄戦に備え、鹿児島県の国分第二基地（現在の鹿児島空港のあたり）で出撃を待った。星野さんは航空兵になるまでは、空中戦で戦っている自分を想像していた。だから、「こんなはずではなかつた」と思ったそうだ。

昭和19年10月、フィリピン戦で初めての特攻作戦が行われたときは敵艦船を撃沈できた。しかし昭和20年3月の沖繩戦にあつては、成果は上がらなかった。しかしこのとき特攻の目的は敵艦船を沈めることではなく、敵に大和魂を見せつけ、敵の戦意をなくすことにあつた。しかし結局これは逆効果で、米兵は日本人に対する不気味さを感じ、日本人を皆殺しにしなければならぬと考えるようになった。この馬鹿げた作戦のために三千人以上のパイロットが戦死した。「軍人勅諭」にあるように「死は鴻毛より軽し」なのだから、上官も簡単に命令できるのである。この史実を知った上で、「永遠の0」を見ると、よくもまあ戦前のこともろくに調べもしないで、嘘八百を並べたものだと呆れかえるばかりである。

星野さんが待機したころ、戦闘機の製造が追いついていなかった。また作戦が変更し、沖繩戦でなく本土決戦に備えて待機することになった。そしてそこで敗戦を迎えた。敗戦直後、飛行機で軍事物資を盗んで一目散に逃げた将校もいた。報復だろうか、肥溜めに突き落とされた将校もいた。特攻隊員は米軍に処刑されるという噂が流れ、星野さんは民間人の服装に着替え

て逃げた。機関車で岐路についたが、爆撃のため、線路がところどころ断線していた。広島焼け野原や瀬戸内海で沈没した艦船を見て、敗戦を実感した。星野さんは「騙された」と思ったそうだ。洗脳が解かれた瞬間であろう。

星野さんは国民学校の先生に会いに行つたが、「お前のような軍国少年は二度と来るな」と追いつ返された。星野さんを軍国少年に仕立て上げたのは教員であろう。私はこのエピソードを聞き、当時の教師はなんと無責任なのかと怒りが込み上げてきた。星野さんの話は鶴彬通信「はばたき」17号、18号で私が書き起こしたものがあるので、詳しく知りたい方はネットなどでご覧いただきたい。

### (10) 休暇で鹿児島県に一人旅

平成28年、私は5年に一回与えられるリフレッシュ休暇を利用し、星野さんが終戦を迎えた鹿児島県に一人旅をした。知覧特攻平和会館と万世特攻平和祈念館に行ってきた。特に、知覧平和会館では書物では得られない多くの学びがあつた。たまたま自衛隊員もぞろぞろと来館しており、無言で展示物を見ていた様子は今も印象に残っている。そして最後に国分第二基地跡

地に行った。鹿児島空港の周りには長閑な茶畑が広がり、おばあさんが畑作業をしていた。この場所から多くの若者が死んでいったという面影はなかった。飛行場を見下ろせる高台に上床公園があり、そこには壊れた戦闘機のプロペラと、国分第二基地の滑走路のコンクリート片が野外展示してあった。特攻兵の銅像の足元に、兵士と思われる遺影と花が手向けられていた。すでに夕暮れとなり、夜景がとてもきれいだった。私は星野さんに旅の報告をした。星野さんはにこにこ聞いておられた。

## (11) 平和教育のこと

戦後、日本人は戦争の反省をしたかと言えば、答えは「ノー」と言わざるを得ない。敗戦直後、皇族でもあった東久邇稔彦首相は「一億総懺悔」を国民に訴えた。これは、「戦争に敗けてしまつて申し訳ない」という意味での昭和天皇への謝罪であり、日本の国民やアジア諸国の人々を死に追いやつたことへの反省ではない。去年、公開された初代宮内庁長官・田島道治の「拝謁記」によれば、昭和天皇が、戦争への後悔を繰り返し語り、昭和27年、反省の気持ちを表明したいと切望していたそう。しかし当時の吉田茂首相が、「戦争を御始めに

なつた責任があるといはれる危険がある」、「今日（こんにち）は最早（もはや）戦争とか敗戦とかいふ事はいつて頂きたくない気がする」などと反対し、昭和天皇の伝えたかつた反省の箇所は全部削除された。吉田茂はなんということをしてくれたのか。これで日本人が戦争に向き合う大きなチャンスを逃がしてしまった。

昭和31年、日本は高度成長期に入り、「もはや戦後ではない」という経済白書の言葉が流行語となつた。平成に入りバブルがはじけ、ずるずると現在に至つている。日本人はあの戦争について、知らない。私も鶴彬と出会うまでは、その一人だった。日本人の多くは、戦争が始まつた日を、12月8日だと勘違いしている。それは対米英戦であり、このときすでに日本は中国と大きな戦争をしているのである。

学校で戦争を学ぶ教材は主に原爆であり、空襲である。これでは被害者意識にしか立つていないし、そもそもなぜ戦争が始まつたのか分からない。私の時代も私の子どもたちも、小学校3年生の国語の教科書で「ちいちゃんのかげおくり」という物語で初めて戦争を学校で学ぶ。主人公の少女の父が出征し、残された家族は米軍の空襲に遭い、逃げ惑う途中で母と兄とはぐれ、

